

高山

たかやま

高山の原生林を守る会

会報 第 83 号

2012年12月



金谷川・愛宕山 冬の里山観察会に参加して 柳田 美津子

11月25日、今年最後の観察会が愛宕山で行われました。愛宕山は松川・関谷地区の東北自動車道福島トンネルの真上にある271mの小高い里山です。

登山口は県道194号線の東北自動車道上の東側から北方に向かい、左側に愛宕神社参道入り口の道標がありました。愛宕山頂上には愛宕神社があり、地藏仏や羽黒山の石碑が祀られていました。記念碑に、愛宕将軍地藏尊は300年前建立された関谷北郷最古の山土仏であり、神社社殿は平成14年に再建、屋根を銅板に葺き替え次代に引き継ぐ。とありました。また参道途中に湯殿山の石碑もあり、かつての部落の信仰の深さが窺えましたが、今は訪れる人もないのか拝殿周りはススキで荒れ果て鬱蒼としておりました。

山裾の鳥居手前と北側には孟宗竹の立派な竹林があり、火伏せに靈験がある神と信仰された愛宕将軍地藏尊に関連があるのか京都の風情を思わせるような竹林でした。また竹の子から数カ月で成長した青竹の大きさに驚きました。鳥居先の参道は急勾配で、落葉広葉樹林の二次林が続きました。落ち葉はナラガシワが多くみられました。ブナ科コナラ属のナラガシワは、葉柄がありコナラにも似て、また葉の中央部分の膨らみと鋸歯のなめらかさはカシワに似ていました。

ニシキギやハリギリ、タカノツメ、葉柄の長いエンコウカエデなどの落ち葉を観察しながら登りつめると、アオダモのかわいい鼠色(ハトバネズミイロ)の冬芽やネジキの赤い冬芽の可愛らしさに目が止まりました。すっかり落葉して裸になった木立の中にも照葉樹のウラジロガシや針葉樹のタチシャジマ(らしい:注参照)が緑豊かに茂っていました。サルトリイバラの葉の光沢からシオデやヤマカシユウとの違いに話が及びました。サルトリイバラはユリ科シオデ属でツル性の落葉半低木。葉は互生し光沢があり、茎にとげがあります。基部は丸く3~5本の葉脈で果実が赤。またシオデも同じ分類でツル性の多年草。葉は同じく互生し光沢もありますが果実が黒く、茎にはとげがありません。



愛宕山全景



落ち葉を観察



地衣類の象形文字

参道で見つけたものは若木のためか葉の緑がうすくシオデに似ていましたが、茎のとげでサルトリイバラとわかりました。

下山は北側の斜面を下ると株立ちの木々が目立ち、里山の趣を感じました。途中でトリガタハンショウヅルの葉の説明を受けましたが、花はまだ見たことが無く、図鑑で淡黄白色の花弁状の萼片をもつミヤマハンショウヅルに似たかわいい花とわかりました。

晩秋の山里にはベニバナボロギク・アメリカセンダングサ・ヨウシュヤマゴボウなど帰化植物がたくさんの実をつけておりました。雑草にも目が向くのが観察会で、今回もいろいろ教えていただき学ぶことができました。

その後は立子山青少年センターに移動。昼食は、みなさんの持ち寄りの美味しい御馳走を遠慮なく頂き、満腹状態で総会に臨みました。総会終了後は佐藤代表よりスライドを交えて、吾妻山の花々や放射能等の詳しいお話を伺いました。これもまた次世代に繋ぐ悲劇となってしまうかもしれませんが、いつか放射能の無い安心して住めるような福島に戻れることを祈るだけです。

(注:後日、観察会に参加された「国見山に親しむ会」の別所智春さんから図鑑のコピーをいただき、ネズであることが分かりました。別名ネズミサシともいいます)



ノジスミレ

安達太良 前ヶ岳 晩夏の植物観察会に参加して

五十嵐 礼子



前ヶ岳山頂にて



わい性化したヤシャブシ林

今回はいも煮会ということで、秋の楽しみのいも煮食べたさに参加しました。

いも煮会の下準備は渡辺あや子さんと佐藤久美子さんがして下さいました。守さんが感激するほど手早くできあがり、参加メンバーはくんと(ママ)なべを囲み、奥田さんこと鍋奉行のおかげでお鍋全部完食して、みんなおなかの重く動けないくらいでした。

心配していたお天気も雨も降らずに助かりました。この前ヶ岳のコースでは森のはじまりを見せていただき感動しました。「県民の森」から杉、松の林の中を走さん、奥田さんの車で林道を進み観察会の登山をスタートしました。

1 時間半ほどの登山の中には森あり、岩場あり、そして頂上は風が強かったのですが、和尚山、安達太良山などなど美しい山々が見晴らせました。帰りはお昼のいも煮会へと心は飛んでいました。

今回のテーマ、“はんのき”をお花事典から書きうつします。

はんのき(榛木 赤楊 Japanese Alder)かばのき科

はんのきは別名、針の木の転訛したもの。はりのきは語源不詳。我が国の原産で北海道、本州、四国、九州の林野の湿地に好んで自生する落葉樹生高木である。花期は3～4月 新芽の季節にこの雌花の形態・色彩が面白いので花材として利用される。球果は昔から染料に利用され、材は建築材、器具材などに使われる、はんのきの仲間には我が国でも10種類あり、やまはんのき(山榛木)けやまはんのき(毛山榛木)など形態はともに酷似して

いる。おおばやしやぶし(大葉夜叉五倍子)ひめやしやぶし(姫夜叉五倍子)などもはんのきの仲間と同様の形態をしている。



稜線の植生は礫岩を縫うように形成



構造土



森の始まりはミヤマハンノキから

9月末、孫がツマグロヒョウモンの幼虫を見つけたのをきっかけに、幼虫の大きいやら小さいやら、合わせて10匹くらい世話をしながら観察しました。10月の中ごろに入って、連日一頭ずつ、♂♂♀♀の順に羽化しました。側溝の水の中に落っこちているのをすくい上げた小さい幼虫の方も順調に育ち、蛹化し、10月末には、♂♂♀♀♂♂の順に羽化して飛び立っていきました。

ツマグロヒョウモンの幼虫の世話を始めたころから、急に気温が下がってハラハラしました。というのは、ツマグロヒョウモンは、日本では三重県以西に分布する蝶と聞いていたので、東北の福島の地で越冬するのは無理なのではないか、つまり、低温になると幼虫も蛹も死滅すると思っていたからです。それで、世話している幼虫や蛹を、本格的な寒さが来ないうちに早く羽化させてしまいたい、そればかり願っていました。だから、世話をした幼虫がみな無事に成虫になり、飛び立ったときは本当にホッとしました。

ところが、その後、散歩に出ると、どこからか、ひら〜りとチョウが現れます。見ると、ツマグロヒョウモンのみだったり♀だったり。もしかすると、うちで羽化したチョウかもしれません。たとえそうでなくても、ツマグロヒョウモンが元気に飛び回っているのを見るのは嬉しいものです。と同時に、このチョウたちのその後のことが気になり始めました。幼虫の世話に夢中になっていたときには、成虫になってからのことは考えないことにしていたのですが、元気に飛びまわる姿を見ると、このチョウたちの命は継承されるのか、やはり気になります。秋も深まり、寒さに向かっていても、そんなことおかまいなしに♀チョウは産卵するでしょう。その卵はどうなるのでしょうか…。



数年前、読売新聞で「福島にツマグロヒョウモンが出現！温暖化の影響か」というような見出しの記事を読んだ記憶があります。今夏、私はツマグロヒョウモンを数多く見かけました。そのツマグロヒョウモンが、福島以外のところから飛来してきたものなのか、温暖化の影響によって、すでに福島の地に土着した子孫なのか、私は分かりません。以前、ツマグロヒョウモンが話題になったとき、Sさんは、ツマグロヒョウモンは園芸用のパンジーを食するので、パンジーと一緒に幼虫や卵が移入した可能性があるかと話してくれました。なるほど、ツマグロヒョウモンはパンジーとともに福島入りしたのか！と納得したのでした。そのときは、ツマグロヒョウモンが《福島で越冬するのか》どうかなど、気にもしませんでした。

その時点から数年を経て、今年、たまたまツマグロヒョウモンの幼虫とかかわって、ハッと気がつきました。園芸用のパンジーが店頭で並ぶのは、春先だとばかり思っていたが、今の季節もパンジーが売り出されることを、つい先日、新聞の折り込みチラシで知りました。その大量に入荷したパンジーに、もしツマグロヒョウモンの幼虫や卵が付いていたとしたら？その幼虫や卵は、日当たりのいい庭先の、プランターに移植されたパンジーの根元でじっと冬を越すかもしれません。ということは、私が世話したツマグロヒョウモンの子孫だって、日当たりのいい道端のスミレの根元で、冬を越すかもしれない！そう気づいたのです。そのうえ、保育社の「原色日本蝶類生態図鑑(Ⅱ)」の、ツマグロヒョウモンの頁に、次のような記述があるのを見つけたのです。「奈良県生駒市では人家の庭のスミレに依存する亜終令～終令幼虫が、ときに-7℃以下になる屋外で毎年越冬しているという。」これは奈良県のことだけれど、-7℃以下で越冬する個体があるというなら、ここ福島で越冬することも十分考えられます。私はなんとしても幼虫を探して《越冬するかどうか》確かめてみたいと思いました。

11月の第1週の日曜日、もしやと、9月の末にツマグロヒョウモンの幼虫がうろうろしていたスミレの株のもとへ行ってみました。願えば叶うもの！8ミリくらいのが1匹と、1.5センチくらいのが1匹、スミレの葉裏に付いていました。なんとラッキーなのでしょう！この幼虫で、越冬できるかどうかを確かめることができそうです。比較的大きい方の幼虫はこれからスミレの葉を食べて育つでしょうから、蛹で越冬することになるのかも。小さいのは幼虫のままで越冬かな。気分はルンルン♪…、とはいえ、暖かい春を迎えるまでは5か月もあるのです。うまくいくとはかぎりません。心配なことがいろいろ浮かんできます。でも、観察してみようと思います。

(2012.11.5)

高山の原生林を守る会 2012 年定期総会報告書

日時: 2012 年 11 月 25 日(日)

場所: 福島市立子山自然の家

1. 2012年活動報告

月 日	内 容	参加人数
1 月 9 日(日)	花塚山空間線量調査	6 名
2 月 12 日(日)	第 120 回 鬼面山西山麓ブナ林観察会	17 名
4 月 8 日(日)	第 121 回 鹿狼山自然林観察会 12.04.08(日)	20 名
5 月 13 日(日)	第 122 回 羽山・愛宕山(斜平山)自然林観察会 12.05.13(日)	16 名
5 月 16 日(水)	福島県における地熱資源開発に関する意見交換会	2 名
6 月 16 日(土)	西吾妻登山道誘導ロープ設置ボランティア(NF 米沢と共同)	10 名
7 月 15 日(日)	第 123 回 高山・夏の山岳植物観察会	12 名
7 月 31 日(火)	福島県における地熱資源開発に関する情報連絡会(第 1 回)	1 名
9 月 30 日(日)	第 124 回 安達太良・前ヶ岳晩夏の植物観察会	11 名
9 月 9 日(日)	霊山空間線量調査(学習院大学・村松教授同行)	2 名
10 月 12 日(金)	福島県における地熱資源開発に関する情報連絡会(第 2 回)	1 名
10 月 20 日(土)	西吾妻登山道誘導ロープ取り下げボランティア(NF 米沢と共同)	7 名
11 月 18 日(日)	虎捕山・野手上山空間線量調査	3 名
11 月 23 日(金)	NF 米沢事業報告会&講演会	1 名
11 月 25 日(日)	第 125 回 金谷川・愛宕山里山自然林観察会・総会	17 名

2. 2012年会計報告

平成 24 年高山の原生林を守る会会計報告書(11 月 23 日現在)

収入の部				支出の部			
科目	予算額	決算額	摘要	科目	予算額	決算額	摘要
前期繰越金	175,361	175,361		会議費	10,000	1,300	総会会場費
会費	50,000	34,000	500 円×68 名	郵送費	30,000	17,160	会報(No80~No82)
観察会参加費	30,000	21,600	300 円×72 名	観察会経費	10,000	3,215	芋煮会材料費
書籍販売	0	0		交通費	20,000	0	
カンパ	0	23,776		保険代	35,000	52,325	
諸謝金	0	0		渉外費	20,000	0	
その他	0	0		雑費	30,000	1,996	ロープ代
合計	255,361	254,737		予備費	100,361	0	
				合計	255,361	75,996	
				平成 24 年度決算額			
				178,741 円(次年度繰越金)			

3. 皆勤賞: 鎌田和子、渡邊アヤ子

4. 2013年活動計画

(1) 自然観察会: 会報に掲載の通り

(2) 山形と共同の西吾妻の登山道保全ボランティアについて

月 日	曜日	山域	作業内容	備 考
6 月 22 日	(土)	天狗岩～西大巔	誘導ロープ設置	NF 米沢との共同開催
10 月 19 日	(土)	天狗岩～西大巔	誘導ロープ取下	NF 米沢との共同開催
10 月 20 日	(日)	(予備日)		

(3) 山岳の放射線量調査: 20 年、30 年のスパンで行う必要があり、気長に続ける。定点観測が大事である

調査候補山岳: 箕輪山、高山、霊山、花塚山、虎捕山、野手上山、高太石山

(4) 福島県吾妻山周辺森林生態系保護地域の保全管理に関する検討会の設置要請

西吾妻山域登山道保全対策を初めとする福島県側の吾妻山周辺森林生態系保護地域の保全管理について震災原発事故後は話が進んでいない。環境省裏磐梯自然保護官事務所に再要請する。

質疑応答

1. カンパについて

Q: カンパの内訳は? 助成金や不適切な団体等からのカンパが含まれていると問題になるので明記してほしい。

A: 郡山の関根さん、山形市民オンブズマン講演謝礼などですが、次回からご報告します。

2. 植生回復事業について

NF 米沢より若女平分岐の植生回復事業を環境省に申し入れたいとの提案があった。正式に決まれば通知しますので、植生回復作業ボランティアにご協力をお願いします。

3. いがりまさしさん(ミュージシャン兼写真家) 地方巡回写真展開催について

花 30 点程度を展示する。展示品の送料と保険代 3 万円程度と場所代(会場がコラッセなら無料)を会で負担する。

期間中にミニコンサートを行なうことも相談したい(日程調整要)。

鹿狼山から 23 ～阿武隈の山々～ 小幡 仁子

11 月になり、標高の高い山では紅葉が終わり、吾妻・安達太良の峰々に雪の便りが訪れると、阿武隈の山々が恋しくなる。阿武隈山系では 11 月を過ぎると紅葉が美しい。また、人里近いこともあって、日没が早くなるこの時期に時間もかからず安心して山に登れるのが良いのである。震災前の 2009 年と 2010 年の 2 年間だったが、「阿武隈強化月間」と称してこの時期に阿武隈山地をみんなで歩いた。小春日和の中、落ち葉を踏みしめながらの陽だまりハイキングは何とも言われない安らぎがあった。そして、のんびり歩く里山には芋煮汁がよく似合うからと言って、山頂で熱々のお汁をふうふうしながら食べていた。鼻水をすすりながら食べる芋煮汁は格別に美味しかったなあ。

訪ね歩いた山の中には浪江町の手倉山(631m)や戸神山(430m)があった。苔むした祠や石仏に古くから里山として地域の人々と関わってきた歴史が感じられた。手倉山の頂上岩場には立派な神社が鎮座していた。手倉山に登ったときは風が冷たかったから、その岩の陰で風を避けてお汁を食べた。みんな「美味しい、美味しい」と言って食べていた。そして、高瀬川溪谷の紅葉は息を呑むほどに赤く美しかったのを覚えている。大熊町の日隠山(601.5m)にも行った。モミの大木が林立し素晴らしく立派な山だった。しかも明治時代まで登山道が「塩の径、鉄の径」として使われていたというから、歴史的にも価値のある山だったと思う。しかし、これらの山は、原発事故による放射能汚染により、今では登ることのできない山となってしまった。先日調査した飯館村の野手上山でさえ $13\mu\text{ Sv/h}$ (地面)を超えていたから、さぞ高レベルに汚染されていることだろう。残念でならない。こんな事故さえなかったら、また行くこともできただろうに。

さて、12 月 16 日(日)は鹿狼山の登山道整備と掃除があった。主催は地元新地町にある山の会である。鹿狼山は阿武隈山系の北外れにあり、幸運にも放射能被害からは免れている。土日だけでなく、平日も登る人は多い。先日、私が久しぶりに鹿狼山に登っていたら S 氏に会いこの話を聞いた。「山の会の人だけでなく、鹿狼山に世話になっている方にも呼びかけているんです」と S 氏は言った。「鹿狼山の世話になっている方」という言葉がとても心に残った。私は鹿狼山にはずいぶん世話になっている。春夏秋冬(夏はキツネノカミソリの時だけ)暇があればこの山に登り、花の写真を撮り、植物を観察し、季節の移ろいを楽しんできた。鹿狼山に何かお返しをしなければならない。お掃除くらいはしよう。そう思って参加することにした。

朝、9 時に鹿狼山駐車場に行ってみると、20 名以上の方がスコップや竹箒などをもって集まっていた。ほとんど中高年の男性で、女性は私と年配の方の 2 名だけだった。これは男性の仕事だったかといささか気後れがした。山の会会長や事務局長の挨拶があった。「年末の忙しいときに皆様には～」と始まり「～鹿狼山の神様も喜ばれると思います。」という結びだった。また、鹿狼山神社氏子総代という方の挨拶は「山の会の皆様にとっては登山道ですが、私たち氏子にとっては参道というわけで、整備していただくことを氏子を代表して御礼申し上げます。氏子一同も来週は参道を掃き清めます」ということだった。また、新地町からお茶ペットボトルが提供されていた。鹿狼山が地域に根ざし、人々から感謝され、いつも大切にされていることを改めて感じた。

ところで、私は登山道整備といってもスコップを使うような仕事はできないと思い、庭箒を持って参加したのだった。男性陣が石段脇の掘れたところを直すと石段が泥で汚れるので、そんなところを掃いたり、石段に降り落ちた葉を掃いたりしていた。あんまり役に立っていないなあと思っていたら、「そうやって掃いてもらえると石段がきれいになっていいですねえ」と言われほっとしたのである。箒を持つ手にも力が入った。登山道を上ってくる人達が、口々に「ご苦労様です」と言ってくれた。女の人が一人で登ってきて「ここは一人で来ても安心だからよく来るんですよ」と話かけてきた。久しぶりに同級生二人にも会えた。一人は津波で家を流されていた。「俺も一時はまいったが、今は何とかやってっから」と彼は言っていた。

鹿狼山は良い山である。しかし、浪江町・大熊町の山々は、これからずっと地域の人に整備されることも、参道として掃き清められることもないであろう。悲しくてならない(2012.12.22)。



戸神山の石仏



登山道整備には沢山の人々が来た



整備の様子

東北70紀行(48)「大震災が教えてくれたものⅦ」

～線量計を携えた山旅～

奥田 博

震災の2011年6月18日、萬歳楽山に佐藤守さん等と登って以来、線量計を携えて山に登るようになった。学習院大学村松教授から信頼のおける線量計の貸出を受けたことが大きい。村松教授は福島県のために放射線調査や原因追究、その対策などを提言して献身的な協力を早い段階から実施している。佐藤守さんも、業務として福島県の果樹における放射能影響調査を实践、そこで村松教授との接点が出てきたことが大きい。今や、放射能なしには語れない福島だが、それを体系的に話せる人間は少ない。佐藤守さんは、専門の果樹をベースに、実戦的な経験を基に理論的に組み立てて、今や放射能を語れる貴重な福島県の人材である。彼が代表を務める、高山の原生林を守る会も、そんな巡り合わせで、放射能汚染を自然保護の一環としてとらえて、活動が可能になったのだと思う。

さて昨年6月から今年年末まで、線量計を携えて登った山はこの12月で100山を超えた。2011年30山、2012年70山といった具合である。印象としては、福島県以外の山は安全であるということ。福島県でも会津は、ほぼ安全な領域であること。線量値が高い低い、あるいは安全か危険かという判断は、絶対数字ではなく個人の感覚に負うところが大きい。0.5 μ Sv/hという数値が、危険という方もおれば、何でもないという方もいる。0.25 μ Sv/h程度であれば、誰でも許容するのではないだろうか。

図1は福島県内の山頂での放射線量値(1m)に留めてあるが、その山の最大値は、山頂であることは少ない。詳しい内容は別表(Webのみ)に掲げるが、一応の目安にはなと思う。1年10ヶ月で100山であるが、今後も継続していきたいと思う。(福島近県の山頂での放射線量値は次号に掲載します)

福島県の山岳(山頂)放射線量(1m)



図1(原図は群馬大学・早川由紀夫氏作成のものを使用した)

コヨウラクツツジ (*Menziesia pentandra* ツツジ科ヨウラクツツジ属)

ブナ林から亜高山針葉樹林にかけての林縁や岩礫地に植生する落葉低木。吾妻・安達太良連峰に植生する同属のツツジ類には、ガクウラジロヨウラクがある。ヨウラク属のツツジは、コヨウラクツツジ以外は日本固有種である。コヨウラクツツジのみ海外の寒冷地に分布している。このことから寒冷地型の樹木であることがうかがえる。植生域の重なるムラサキヤシオツツジとは対照的に、コヨウラクツツジの花は小さく、目立たないので注意しないと花を見落としてしまう。種小名は「5雄ずい性」を意味する。花の構造は5数性を示す。



葉は互生であるが枝の先端にほぼ輪生状に5、6葉を着生する。葉形は楕円から長楕円形。葉縁は全縁で葉の表面と縁には長い開出毛が着生する。葉の先端は尖り、その先に腺状突起を形成する。特に、この器官は、展葉初期は球状で赤色を呈し、よく目立つ。早春に開花する他のツツジ類同様、葉の展葉は開花後となる。光合成より、後代の確保を優先しているのだろう。

花は頂性で茎の先端から放射状に長い花柄を伸ばし、2～6個程度の小さなベルフラワーを咲かせる。花柄には腺毛が密生する。花冠の形は、整形から多様に歪む。花冠の先端は黄色を呈し、開花すると5裂片に反転する。花冠の内側は短毛が密生し、花冠から雌しべが突き出る。雄しべは5個、ガクは浅く5裂する。花色は黄緑色から赤褐色までグラデーション状に多様な色彩を帯びる。

コヨウラクツツジの花は同時期のムラサキヤシオツツジと比較すると花の大きさだけでなく、色彩も控えめである。また、同属のガクウラジロヨウラクと比較して花の数も少ない。しかし、コヨウラクツツジは花の形と色彩が多様で、1個1個の花の個体差を観察していると1つとして同じものではなく、飽きることがない。加えて、葉の先端の赤い突起物と長い花柄の先端に着いた花冠との2層構造の姿がユニークで他のツツジ類には無い味わいがある。葉の先端の赤い突起物は訪花昆虫に花の時期を知らせるシグナルみたいなものかもしれない。この花に出会うと、自然に足が止まってしまうのは不思議だ。いつの間にか、この花を見つけるのが早春の山歩きの楽しみとなってしまっている。

ツリバナ (*Euonymus oxyphyllus* ニシキギ科ニシキギ属)

コナラ林からブナ林にかけて植生する落葉中低木樹。ブナ林の基本樹とはされていないが、吾妻・安達太良連峰のブナ林下部では、同属のマユミと並んでよく見られる。マユミ、ツリバナともに果実は鮮紅色で美しい。

葉の着き方は対生。葉形は卵形から長楕円形。葉縁は細かい鋸歯があり、種小名(尖った先端)が示すように葉の先端は細長く尖る。葉の両面とも無毛。低木であるためか、ブナ林の中では林床に充分日が当たる4月下旬頃に他の樹木に先駆けて発芽、展葉する。

花は岐散花序で、葉腋から6、7cmの長い花柄が垂れ下がり、分岐した先に小さい花を十数個着ける。小花の構造は5数性で、花弁は5枚、萼片は5裂、雄しべは5個である。また花托が平板状に盛り上がって5角形の花盤と呼ばれる器官を形成する。雄しべと雌しべは花盤の中に埋もれ、葯と柱頭のみを露出している。花弁は緑白から白であるが、1部の花はうっすらと赤紫色を帯びる。ツリバナ類は5数性であるが、ヒロハツリバナのみ4数性を示し、花弁は4枚なのでツリバナとは花弁数で容易に識別できる。果実は5裂した朱色の仮種皮を傘に、黄赤色の種子が糸を垂れるように吊り下がる。

マユミは花柄の長さがツリバナより短く、花も果実も4の数字を基本とし、分布域もツリバナより狭い。ツリバナは吾妻・安達太良連峰の山麓から1200m付近まで分布する。

かつて、樹木の植生調査のため高山山麓のブナ林を度々、散策していた時代があった。森に行く度に新しい発見があり、またカエデの花の魅力に捕われていた時期でもあった。成熟したブナ林の林床は日差しが限られ、花を着けている樹木は少なかった。そんな中でミズナラとブナの大木の間で、それまで見たことのない白っぽい花をクリスマスツリーのように多数ぶら下げている樹木に遭遇した。その時は葉が対生であったことからカエデの仲間かと思ったが、写真と図鑑との照合でツリバナという樹木があることを初めて知った。マユミ同様、沢の周辺に多いことから、湿性地を好むのかもしれない。



ヒロハツリバナ

第126回自然観察会案内：安達太良県民の森・雪上観察会

日時：2012年2月24日（日）7:30～15:00

集合場所 四季の里交差点正面入口駐車場 集合時間 7:30 参加定員 20名

内容 前ヶ岳山麓に広がる冬のミズナラ林を散策します。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋（軍手複数）、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳、冬季歩行用具（スノーシュー、カンジキ、スキー）

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代（300円）

申し込み：2月23日（土）まで佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします（電話申込は午後7時～9時でお願いします）。

2013年「高山の原生林を守る会」自然観察会計画

回数	月日	曜日	候補地	テーマ	担当
第126回	2/24	（日）	安達太良県民の森	雪上観察	鈴木
第127回	4/14	（日）	小島の森	スプリングエフェメラル観察	佐藤（久）、（鎌田）
第128回	5/12	（日）	斜平山（NF米沢と共催予定）	新緑観察	佐藤（守）
第129回	7/7	（日）	滑川大滝から吾妻・薬師森	夏の山岳植物観察	佐藤（和）
第130回	9/29	（日）	高津森山（651m）（登山口が清水）	紅葉観察と芋煮会	奥田
第131回	11/24	（日）	高松山（195m）	里山の陽だまり観察	小幡
総会	11/24		もちずり学習センター（代替案：ヘルシーランド）		

●代替候補地（観察会候補地は変更になる場合があります）

・高湯スキー場跡地・古霊山・蟹ヶ沢・中吾妻ブナ林・的場川コース、狐郷山（川俣）・斗蔵山（丸森）

2013年カタクリの会奥羽自然観察会計画

月日 （曜日）	回数	自然観察会 のテーマ	観察地
1/20 日	265	冬の廻戸小屋	西和賀町廻戸
2/17 日	266	雪の自然観察	西和賀町沢内志賀来
3/17 日	267	春を見つけよ	西和賀町川舟
4/28 日	268	カタクリの里歩き	西和賀町無地内・廻戸
5/12 日	269	夏椿と夏の渡り鳥	西和賀町未来の森、野々宿
6/9 日	270	新緑のブナの森	西和賀町真昼ブナ指標林
7/21 日	271	和賀川歩き	西和賀町貝沢・星めぐりの森
8/25 日	272	ブナの森の滝巡り	西和賀町下前風景林
9/15 日	273	歴史の道と秋の草花	西和賀町白木峠
10/20 日	274	植樹と苗作り	西和賀町貝沢・星めぐりの森
11/3 日	275	落ち葉と冬の渡り鳥	西和賀町沢内志賀来
12/1 日	276	初冬の森	西和賀町内

- カタクリの会は西和賀町で、自然観察会開催を目的とした会です。
- 誰でも自由に参加できますが、各観察会の1ヶ月前から電話でのみ受付です。
- カタクリ通信を偶数月に発行しており、希望者には年間千円で送付致します。
（郵便振込みをご利用ください：
02350-5-38765 加人者名：
カタクリの会）
- 連絡先：〒029-5512
和賀郡西和賀町川尻 41-72-15
電話&FAX**0197(82)3601**
代表：瀬川強

新年度の会費納入をお願いします：郵便振替**02170-0-24351**「高山の原生林を守る会」へ

【編集後記】「高山の原生林を守る会」が設立されて25年が経過した。今年も、会員の皆様のご協力で、充実した観察会を積み重ねることができた。東京電力の原発事故で発生した放射性物質は広大な森林環境を汚染したままである。事故からまだ2年も経過していないにもかかわらず、「フクシマ」は「ヒロシマ」「ナガサキ」「オキナワ」同様、隔離されたコロニーのように扱われ始めている。原発が最悪の環境破壊の原因となった事実は、もう忘れられたようだ。「脱原発」が政争の具とされることなく、真に市民権を得られるような取り組みが求められている。事故以来継続している放射能による森林の環境汚染を直視する当会の試みが市民レベルの「脱原発」実現に向けた一石となり、波紋が広がることを祈っている。

「高山」高山の原生林を守る会会報 第83号 2012年12月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP：<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：佐藤 守 Phone 024-593-0188（夜間7時～9時）

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費（500円）を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田・鈴木